

図書館員の四季

SOS!

国立大阪病院 藤本 敦子

阪神大震災で被災された方々には、心よりお見舞い申し上げます。

幸いなことに当院図書室においては、被害も軽少で、書架が2連倒れただけですみました。倒れた書架を組み立て、図書を配架し終えた矢先のことです。図書室に機械化の波が押し寄せて来ました。

その1つは、入室時にIDカードを利用するという事です。24時間利用を目的に設置されたのですが、「機械が番号をうまく読み取らない」、「カードの出し入れが面倒だ」という理由から利用者もめっきり減り、今では文献依頼の時にしか利用されなくなりました。

2つめは、「図書室業務をコンピュータ化しろ!」との御上の命令でMacintoshが設置されたことです。当院図書室では、資料が少ないため相互貸借業務に主流を置き、モデムを使って相貸を始めたのですが、やはりここにも問題が生じました。依頼書を送信するまでは活気的で「さすがコンピュータだな」と感心していたのですが、最終段階の料金計算から会計への報告までにおいて、融通性のなさにてこずっているのが現状です。

また、今年中には、各医局および図書室にインターネットが導入されるとのことです。これに関してはまだ予測の段階ですが、「図書室に文献を依頼しなくていい(ひいては、相貸業務が減る)」、「図書室が静かになる」といった声がちらほら……。資料が少ない上に相貸業務までがいらなくなってしまっは、病院図書室の価値はどこにあるのでしょうか?このままでは、司書が本とコンピュータの管理人になってしまうのではないかと不安

です。

今はただ、押し寄せて来る波をどう乗り切ろうかともがいている毎日ですが、このような機械化をふまえた上で、魅力ある病院図書室を運営するにはどうすればよいのでしょうか?また、形を変えつつある病院図書室に戸惑いを感じております。

会員の皆様、よい案、事例がありましたら教えて下さい!

産休を終えて

公立陶生病院 岩瀬 真奈美

長い産休期間があけてみると、「そこ」は「図書室」であった。眼前に広がる何と整然とした空間!

利用者の不安をよそに、揚々と産休へ入ったのは、昨年12月のことだった。新任者は前名古屋記念病院図書室担当の伊佐治裕子氏に決まっていた。図書室業務はもとよりオンライン文献検索までしっかりお願いして、私は足の踏み場もない「そこ」(そこ=倉庫?)を後にした。産休があけ2人体制になったら整頓しましょうなどと言っていたのに……。さすがは伊佐治氏であった。

当院の図書室は、今年の4月から2人体制でのスタートをきった。業務は完全にバンク状態にあったが、心強い担当者を得て、ようやく新しい第一歩を踏み出せたと思う。現在、図書管理業務全般と相互貸借業務は伊佐治氏が、文献検索と業績管理、スライド作成などは岩瀬が担当している。相互貸借用FAX、NECのPC2台、Macintosh 4台をフル稼働して業務に当たっている。いま、ひとりで悪戦苦闘してきた5年余りを思い、理想を語り、共に働くことのできるパートナーがいてくれるこ